

復興と伝承が並行する中で見えた課題と学び

私は昨年度の被災地巡検に参加できなかったため、今年度こそ事前学習から意気込んで準備していた。事前学習をする中で、大川小学校は他の震災遺構とは明らかに異なっていると知り、遺族の言葉や被害の実態、裁判について調べる中で十分に凄惨さを理解しているつもりであった。しかし、そんな自分に対する評価は大川小学校を訪れて誤っていたと気付かされた。実際に訪れてみて予想を遥かに超える強い衝撃を受けた。自分で調べる事と、現地ですべてを聞くことでは受ける印象が大きく異なると感じた。津波の高さや被災者の人数など、具体的な数字を知っているだけでは、震災の本質的な理解には至らないと感じた。

大川小学校では津波で娘さんを亡くした佐藤さんが案内してくれた。小学校周辺には建物がほとんどなく、震災の痛々しさがあちこちと残されていた。佐藤さんは、当時の具体的な状況や被害の実態についても語ってくださったが、大川小学校でも普通の日常生活が送られていたということを強調して説明してくださった。私には印象に残った佐藤さんの言葉が二つある。一つ目は、「『あの』大川小学校と言われるが、『あの』ではない日々があった」という言葉だ。私は震災のことをどこか特別な日で特別な出来事だと思っていたが、被災地にも私たちと同じような日常があったのだと気付かされた。特に、佐藤さん家族も私たちと同じ普通の家族だったことに気づいた時、強い悲しみを覚えた。二つ目は、「伝えたくないことを伝えるのが伝承活動だ」という言葉だ。伝承とは単に出来事を記録するだけでなく、辛くて目を背けたくなる現実をあえて伝えていく営みであると感じた。佐藤さんの娘さんについて語る時の口調や声のトーン、震えからもそれを強く感じる事ができた。私はこれらの言葉を通して震災の記憶を正しく、強く訴えることの難しさと重要性について深く考えさせられた。これらの言葉は実際に震災を体験していないと出てこないと思った。また、他の施設は大川小学校周辺とは違い、少しずつ街並みが戻ってきているのを目にし、復興が進む中で、こうした日常の存在や伝えにくい事実は見えにくくなり、次第に意識されにくくなると感じた。

被災地巡検を通して、私は復興と伝承について様々なことを考えた。復興が進まなければ被災地の人々の生活は元に戻らず、日常を取り戻すことはできないだろう。一方で、震災の痕跡や悲しみを残し続けることが必ずしも望ましいとは言えないとも感じた。また復興した街からは、地元の人々の想いや一体感、そして前向きに進もうとする明るい空気を体感することができ、そこから前に進むための復興と記憶を残すための伝承は時に相反する側面を持っていると考えた。復興を進める中で、伝承活動とどのように両立させていくのかを考えたと思った。

中浜小学校を訪れた際、震災遺構にするために四億七千万円かかったと聞いた。震災遺構を保存していくためにさらに多額の費用がかかると予想される。このような経済的な課題も伝承を続けていく上での難しさの一つであると感じた。一方で私が衝撃を受けたように、震災遺構は当時の状況を直接伝えることができ、言葉では伝わりにくい現実を強く訴えかける

役割を持っている。そのため、何をどのように残していくかについて今後も考え続けていく必要があると感じた。

また、大川小学校を案内して下さった佐藤さんは、震災当時、道路が壊れている中、地域の方が船を使って何度も川を往復し、見知らぬ人々を乗せていて、自分も川を渡らせてもらったと語っていた。この話はとても印象に残っている。災害時には行政の支援だけでなく、人と人との助け合い、つまり共助が大きな役割を果たすことを学んだ。こうした実体験に基づく話は、災害時にどのような行動をすべきかを具体的に考えさせるものであり、伝承の意義の一つであると感じた。

さらに、「避難訓練の本番は失敗すれば命に関わる。失敗しない訓練には意味がない」という言葉も印象に残っている。これまでの訓練は形式的に行われている部分が大きかったと痛感させられた。実際の状況を想定した実践的な防災教育の必要性を感じた。また、現在学校で準備を進めている事前予告なしの避難訓練との関連性も感じ、以前よりも自分ごととして捉えられるようになった。それまでは恥ずかしいけれど、避難訓練の準備もどこか他人事として考えていたことにも気づかされた。このような学びもまた、震災の経験をもつ人から伝えられて初めて得られるものであり、伝承が防災意識の向上につながると考えた。

また、伝承活動を担う人々の中に若い世代が少ないことも課題であると感じた。語り部の多くは出来事を実際に経験した世代であり、時間の経過とともにその数は減少していくと考えられる。門脇小学校では大学生が研修に参加している様子も見られたが、こうした取り組みを広げ、震災を経験していない世代がどのようにかかわっていくかが今後重要であると考えた。

今回の巡検では、東日本大震災について多角的に知ることができた。震災の悲惨さ、当時の状況、残された人の思い、そしてこれからの課題などだ。私は帰りのバスで自分には何ができるのかと漠然と考えていた。二日間で感じたことを、情報量が多く十分に整理しきれていなかった。そのため、バスの中で発表した感想もとても感情的なものになってしまった。帰宅して考えを整理した今、それをここに記したいと思う。

まずは、防災啓発活動についてだ。私は一年次から防災班に所属していたため、新潟の防災イベントに参加したり、防災部通信の発行に携わったりしていた。イベントの中で新潟県防災士会の方々から、防災に関する知識を教えてもらい、それを訪れた人に具体的な数値とともに十分に意識せず発信していた。しかし、今回の巡検でどのように伝えるべきかを学んだので、それを活かしたいと思う。ただ「この地区が液状化現象がひどそうです」や、「このくらい津波が来ると予想されています」という情報だけでなく、それとともにすべき備えや必要な情報を伝えていきたいと思った。次に学んでいきたいことについてだ。私は事前研修の段階で、行政や自治体の対応の違いに興味を持った。地域ごとに防災体制やマニュアルが異なることに加え、その違いが被害状況にも影響を与えていることが分かり、防災対策のあり方が被害の大きさを左右する要因の一つであると考えた。高校から大学へ進学する中で、より専門的に学ぶことが可能になると考えている。その中で、行政学を学び、災害時に

おけるより適切な対応や防災体制のあり方、避難用マニュアルの改善などについて探究し続けたいと思う。また、大きな災害が起きていない地域でも、防災について広めるためにはどうしたら良いのか考え続けたい。

私は今回の巡検に参加できてとても良かったと思う。新たに得た知識や経験をまずは身近な家族を守るために活かし、将来的には社会に貢献できる人材になりたいと考えている。